

平成十八年三月

蟹江町歴史民俗資料館

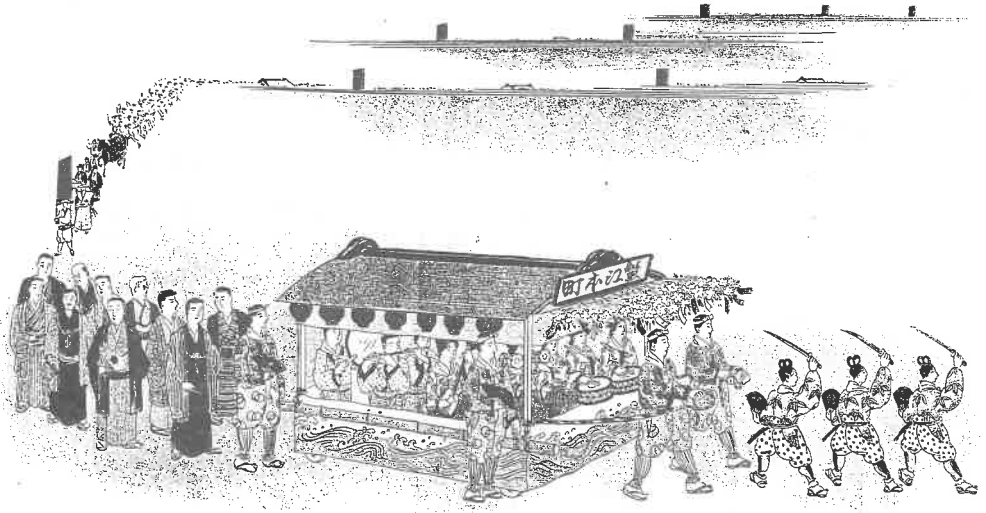
年報

第二十六冊

目次

一 「沿革誌」より	1
二 事業概要	2
三 資料の収集・保管	3
四 展 示	11
五 調査・研究	15
六 情報提供	17
七 教育普及	18
八 庶務報告	31
九 文化財保護	32

蟹江祭



大正14年郷社神明社昇格記念帖より

平成16年11月6日(土)～12月5日(日)
(月曜・祝日休館) 午前9時～午後5時

場所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室

(蟹江町大字今字蟹江浦23番地)

主催 蟹江町教育委員会 生涯学習課

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係 (歴史民俗資料館)

TEL/FAX 0567-95-3812

開催にあたって

9月の最終土曜日と日曜日に蟹江本町の神明社の祭礼として行われている蟹江祭。蟹江本町の8つの町内からそれぞれ祭屋形や祭囃子の巡行が行われ、蟹江町内の秋祭としては、一番のにぎわいを見せています。

この祭は、古くから盛大に行われ、江戸時代には尾張藩主の命で名古屋城まで行列をなして出向いたこともあるといえます。当時は現在とは比べものにならないほど華やかで、袴を着た幸領が先頭を歩き、豪華な馬具で飾った馬を奉納する「馬の塔」や、少女たちが華やかな衣装を身にまとい踊る「道踊り」などが各割から繰り出され、祭の行列は長蛇の列をなしたといい、昭和初期まではこのような盛大な余興がよく行われていたということです。

ところが昭和20年代以降は、「本格」といわれる盛大な余興は行われることは無く、一時期は8つの屋形がそろって奉納されることもなかったことさえありました。しかし、平成になってからふたたび祭を盛り上げていこうという機運が高まり各町内で祭囃子の伝承活動が行われ、最近では「道踊り」も一部復活されてきています。

今回の特別展では、蟹江祭の変遷や祭の行事等に関する資料や写真を展示し紹介いたします。現在残された豪華な馬具や絵図、写真を見てみると、かつてどれほど華やかな祭であったかが容易に想像できることと思います。これを機に、蟹江祭をはじめ、郷土の祭への関心を高めていただければうれしく存じます。

なお、今回の特別展開催に際して、蟹江神明社の氏子の方々、蟹江本町の各町内会、祭保存会の方々を始めとした多くの関係各位にご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

平成16年11月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1 蟹江本町の神明社について

蟹江本町の神明社は、蟹江町のほぼ中心地、蟹江町大字蟹江本町字両五の蟹江川沿いにある。祭神は天照大神である。



神明社がいつごろできたかは定かではない。寿永元年（1182）に「蟹江保」が存在したとされ、そのころには集落があり、何らかの形で神社があったであろうと考えられるものの、ただちにそれが神明社だということはできないが、古くから存在していたことは想像できる。

一説によれば、永享年間に北条時任によって蟹江城が築城された時に、守護神として神明社が建立されたと伝えられている。しかし、天正12年（1584）の蟹江合戦の際に兵火によりすべてが灰と化したという。現在神明社に残されている最も古い棟札は天正15年のもので、「建立舞殿燈明二本施主村人ホ」、「奉建立社殿高塀施主村四郎左衛門」とある。四郎左衛門とは、鈴木四郎左衛門のことであろう。鈴木家は、神明社のすぐ東に屋敷を構えた土豪で、蟹江合戦でも活躍し、その後新田開発を推進、後に蟹江姓となった。この後も鈴木家は玉垣の修復や燈籠の建立にも関わっている。

その後元和5年（1619）11月に社殿が再興された。この再興を裏付ける棟札には、禰宜寺西三太夫家長のほか、龍照院の権少僧都俊盛の名があり、須成の常楽寺龍照院と関係があったことがうかがえる。さらに、元禄14年（1701）9月第四代尾張藩主徳川吉通の命により瑞垣と鳥居を再興、正徳4年（1714）9月には、第六代藩主徳川継友の命により社殿を修復しており、それぞれ、棟札が残っている。

当初は村社であったが、大正12年（1923）12月28日に社格昇格進願を内務大臣に提出、大正14年1月9日に郷社に昇格した。

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

「須成の文化財」



町指定文化財 鋳口(龍照院)

平成17年1月29日(土)～3月6日(日)

(月曜・祝日休館) AM9:00～PM5:00 入場無料

場所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室
(蟹江町大字今字蟹江浦23番地4)

主催 蟹江町教育委員会 生涯学習課

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)

TEL/FAX 0567-95-3812

特別展開催にあたり

蟹江町歴史民俗資料館では、平成5年度に特別展「須成神社の宝物展」を開催いたしました。須成地区の須成神社（富吉建速神社・八剱社）、及び同社の祭礼である「須成祭」に関する資料の展示が中心でしたが、それから10年が経過しました。

この10年間に文化財所在地では、文化財保存修理及び防災に関する事業が数多く実施されました。

例えば須成神社は、平成8・9年度に文化庁からの補助事業で両本殿の保存修理と防火受信施設の更新事業を実施。その後平成13年度には周辺の防災事業の一層の強化のため防災対策事業を実施致しました。

須成祭については祭道具等の修理及び更新事業を平成12年度・15年度に行い、平成13年度には、文化庁の民俗調査を經まして、国選択無形民俗文化財に選択されるなどの変化がありました。このことは地域住民の皆様を始めとして、町内外の多くの方々が、約500年にもわたり連綿と受け継いだ同祭事に対する関心を高める機会となったと思われます。

そして、平成15・16年度、文化庁の新規事業により龍照院において、国重要文化財「木造十一面観音立像」の保存公開施設を建設中です。この施設の最大の特徴は、従来の資料保存重視だけではなく、公開のための処置がなされているということです。また、免震台の導入などの地震対策が施されています。

この10年間に於いて、須成地区における文化財の環境は大きく変化したと思われます。また、それに従事される方々の思考も大きく変わったのではないのでしょうか。

須成地区は、蟹江町最古に形成された地区であり、それを裏付ける地域の歴史文化資料が豊富な地区であります。この地区でのこれからの「まちづくり」についての方向性は、歴史文化資料を活かしたものであるのかも知れません。

この度の展示には、須成神社様・須成文化財保護委員会様の他、蟹江山常楽寺龍照院様のご理解とご協力をいただくことになり、前回の特別展に比較して須成地区の歴史文化形成の全体をより一層理解できるような資料が展示室内にて一堂に会しました。同地区「人物編」としましては後藤昌之様から神田鏑藏に関する資料提供をいただきました。

本年度から歴史民俗資料館では、ガイド・ボランティア制度「蟹江歴史文化夢案内人」養成講座を実施し、歴史文化に関心のある方のご参加をいただいております。

蟹江町の「履歴書」というべき歴史文化資料の展示とともに、地域理解を高め、関心を醸成するためには、「蟹江歴史文化夢案内人」各位の積極的な参画をいただき、今後の生涯学習と文化財保護事業を推進して行く必要があると存じます。まずは今回の特別展がその「起点」となるよう期待したいものです。

なお、関係各位には特別展開催にあたり、同館の開催趣旨を理解いただき、多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成17年1月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

蟹江町「須成地区」の歴史について

蟹江町の須成地区は、町の北の端位置した集落で、その中央を蟹江川が南北に流れ、古くから須成神社（富吉建速神社・八剱社）を中心とした門前町として栄えた地区である。

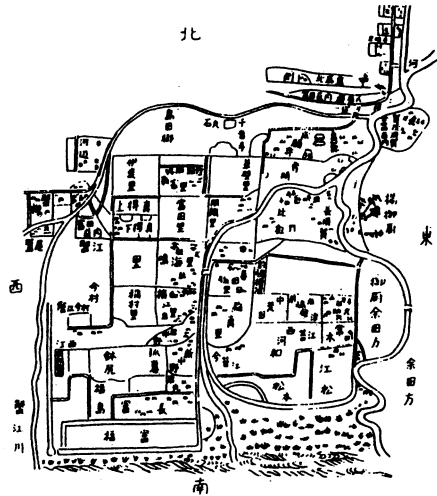
「須成の地名」の由来については明らかではないが、川が運んで堆積し、「沙成」、「砂成」、「洲成」と呼ばれたものが、後になって、現在の「須成」という地名になったと江戸時代の『地名考』『尾張志』には記されている。

この地に人々が集落を築いた正確な時代は不明であるが、同区の須成神社と龍照院は、天平年間（奈良時代）行基菩薩により建立されたと伝承され、平安時代末期から鎌倉時代にかけて木曾義仲・巴御前に縁のある社寺として有名である。龍照院の木造十一面観音は、胎内の墨書銘から、寿永元年（1182）に製作されたもので、当時には、すでに大きな集落が形成されていたと推測される。中世は富吉荘の中心地として交通・経済の要衝地として栄えたようである。

一時、天正12年（1582）の蟹江合戦の兵火による混乱の時代があったが、以後両社寺を中心に、江戸時代後期（1800年代）には定期市の六斎市が設けられ、門前町として繁栄した地区であった。

現在、須成神社両本殿と龍照院木造十一面観音立像は、国の重要文化財に指定され、それに付随する資料が町指定されているように、古くからの文化財が数多く存在する「歴史と文化」の豊かな地区である。

須成神社の祭礼として伝承されてきた「須成100日祭」は、織田信長・豊臣秀吉の時代から、今日まで約500年間の長い伝統と由緒をもった祭で、特に8月第1土曜日の「宵祭」と翌日曜日「朝祭」は、優雅な川祭として訪れた多くの人々を魅了する祭として有名である。須成祭は、平成14年2月に「国選択無形民俗文化財」に選択されている。



富田荘の古図（愛知県史による）